

● 第三部 印象記

「全人代」を乗せたバス

池 本 正 純

今回の中国旅行は幸か不幸かちょうど「全人代」開催の時期と重なった。確かに「不幸」はあった。工場見学の初日、中国人の案内役が北京市内の交通渋滞に巻き込まれ、ホテルへの到着が遅れてしまったからである。しかし「幸い」なことに、それを通して社会主義中国における国家の権威というものをまの当りにする機会を得たとも言える。北京市を東西に貫くメインストリート長安街が、朝のラッシュ時に、2,678名の全国からの代議員達を市内の各ホテルから人民大会堂へ運ぶ特別仕立てのバスの列によって連日独占された。長安街に交わる道路という道路は車やバスで埋まり、びたりと止められて動かない。威圧的ではあるが壮観であった。人民大会堂の高い屋根にはぐるりと大きな紅旗が数多く掲げられ、それらがへんぼんとたなびいている。今ここに国家の最も重要な行事が行われていることは誰の眼にも明らかであった。

この表向き（政治レベル）の仰々しいまでに硬質な建前と、社会の内部でなし崩し的に進行している本音にもとづく取引（市場経済）とがどのように調和・統合されるのかという問いが、今回の旅を終えた後も私の頭の中を渦巻いている。両者の異質性のゆえに「分裂病」に陥ってしまうのではないかという懸念。いや、むしろ政治の「たが」がはずれていないという社会心理的依り処があればこそ、不透明な市場経済化の海へ足を踏み入れることが可能になっているのかも知れないという「社会主義的市場経済」への可能性の期待。いや、それにしても、政治的側面からの党の支配力と経済合理性を追求しなければならない経営の原則との矛盾は歴然とあるのではないか。いや、よく考えてみれば、日本の戦後の高度成長にしてからが、官と民の合作だったのではないか、それほど「対立」するものと考えする必要はないのではないか。いや、自由主義体制と社会主義体制との根本的な違いを無視すべきではない。一党支配の硬直的イデオロギーはいずれ「桎梏」となりどこかで打破されなければならないはずだ。……旅に出る前から抱えていた疑問は依然として解決したとは言えないが、歴史的な大実験である以上、じっくり眺めるしか仕方ない。



赤旗が林立する人民大会堂＝浅見団員撮影

北京で訪れたシャツ工場の経営者の話しぶりが印象に残る。彼はもちろん党幹部出身であるが、「経営者を労働者による選挙で選ばないのか」という質問に、「みんな自分に都合のいい甘い人間ばかりを選ぶから、経営的にはよくない」と答えた。「民主主義幻想」をとっくに脱却した冷徹な現実主義がそこにあった。「シャツ製造にとどまらず、流通・サービス産業への進出を目論んでいる」というのは、けっして自ら造るシャツの販売ルートの確保というのではなく、デパート経営への進出など会社そのもののひたすらの多角化路線の追求にあると分かったとき、中国の経営者の意外なまでの積極的な拡張主義を感じた。北京の首都鉄鋼会社が「首鋼」というグループ名でホテルや教育産業までを飲み込むコングロマリットに急拡大しているのを知って、その感は一層強まった。これも社会主義から市場経済化するプロセスの一特徴なのかも知れない。組織の維持拡大を至上命令と思う役人の体質と類似していなくもない。とりあえず、企業家は党幹部の中から育っていくしかないだろう。ビジネスを拡大していくうえで彼らの人的ネットワークが大変な武器になっているように見受けられた。

北京から上海に移動すると雰囲気がからりと変わる。確かに江戸と大阪の違いがある。夕方、和平飯店の周りに「株の予想屋」を囲む群れがいくつもあったのには驚いた。日本の競

馬場にたむろす予想屋とまるで同じである。その場所が、かつて租界時代、イギリス人のための競馬場があったそのそばだというのが因縁めいている。その役割がいびつなものなのかどうか私には判断する能力がないが、明らかに資本主義は「浸食」しつつあると感じた。よくも悪しくも資本市場が市場経済の「粋」であると私は思っている。人間の投機心を社会的にどのように手なずけていくかが市場経済の成熟度を決める。今回は果たせなかったが、中国の金融システムがどうなっているのかを知ることが結局、社会主義的市場経済の本質の解明につながるはずである。資金の流れがどのように決まり、その決定の責任を誰が負うのか、私のもっとも知りたい点である。滞在中、China Daily（3月17日付）のある記事は「商業銀行がいくつか設立されたにもかかわらず、農業・建設・商業・海外の各部門に専門化した4つの国有銀行が、いぜんとしてビジネスに必要なとされる資本の80パーセントを牛耳っている」と報じた。記事全体の趣旨は、市場経済の役割をもっと拡大すべきことを訴える点にあるが、金融機関の貸し出しが政府の命令によって決められるウェイトが高すぎることに、また貸し出し金利が公式には預金金利とさして違わず、手数料名目で高い恣意的な実効金利が横行していることが金融に関連して指摘されていた。

このたびの「全人代」での重要決定の一つが中国人民銀行の役割を明確化した中央銀行法の成立である。それは、経済成長率を上回っているインフレーションの抑制を旨としたものであり、具体的には人民銀行の独立性を強化することが唱われている。この点を含めて上海社会科学院のS氏に問うてみた。興味深かったのは、公的な関与が強いと言われる資金配分も、中央から地方政府へとその決定権限が現在次第にシフトしつつあるということであった。方向としては情報のある「現場」の声が通りやすくなっているということだろう。インフレについては意外なほど割切った答えが返ってきた。「中国全体を見ると、インフレが発生しているのはごくわずかの地域なのです。成長の著しい地域に集中しています。一般の国民の感情からすれば、インフレが発生するほどに経済成長の機会が欲しいというのが本音だと思います。」「あっ、そう！」と思わず唖ってしまった。

S氏の話の中で一番面白かったのは、中国が今学ぶべき経済学者は、スミス、マーシャル、ケインズの3人だ。それだけで十分だと喝破した点である。とくにマーシャルを強調するに至っては、「我が意を得たり」を通り越して、どきりとした。日本でマーシャルに注目する人は稀である。よもや中国でその名が出てくるとは思わなかった。話をするうちに、マーシャルは経済学者の中で抜群に現実の経済をよく知っていたこと、そしてとくに商業の役割について明快に論じていることなどが、自分と共通の認識としてあることが分かった。S氏は今、日本の商社について研究したいと言っておられたが、むべなるかなである。

旅行に冒険はつきものである。危ない目に会いたくないが、アバンチュールの香りが旅の味を深くさせる。その香りをもっとも持っているのが本研究所の事務局長（当時）のT氏だと私は見抜いている（断わっておくが彼は思想的に冒険主義的である訳ではない。むしろ逆だ。念のため）。私はひたすらT氏にくっ着いた。何か楽しいことありそうだなと。

上海の南京路の夜の徘徊、和平飯店の古ジャズ、路地裏を迷い込んで入った小さな食堂、それぞれ楽しかったが、豫園では彼とはぐれてしまった。観光コースのみやげ物屋と違い、まったく日本語が通じない。もちろん英語も。片言の中国語を頼りに店の人とやりとりをしていると、突然、殺気だった男が自分の前に割り込んできた。背広の内ポケットからまだビニール袋に入ったままの金の鎖を半分あたりまで引出し「いくらで買ってくれる？」と交渉を始めた（らしかった）。結局、折り合わず彼はあわただしく去っていった。あれはきっと盗品だったのだろう。そばに居たこちらまで一緒に興奮してしまった。豫園は確かに浅草のようではあるが、それ以上に闇市的なところもあると一人納得した。気がつくともう集合の時間が過ぎている。置いていかれたら大変とあわてて戻ると、一人足りないという。振り帰るとT氏が通りの向こうを走ってこちらに来るのが見えた。一体どのようなアバンチュールがあったのだろう。

蘇州から上海へ帰る車中、例によってT氏の隣に座った。ボックス席の前には中国人夫婦と小学生ぐらいのかわいい娘が座った。ところがここでT氏の冒険主義の虫が蠢き始めた。何と向かいの席の家族に話しかけてみようというのである。中国語もできないのに何という無謀な。一言二言ならまだよい。列車はスタートしたばかりなのだ。その後の空白をどうするのだ。予想される気まずい沈黙の緊張をどう切り抜けようというのか。躊躇する私を尻目に彼は声を発した。

いくらか助かったのは、女の子が少し英語が理解できたことである。しかし、それでも大して通じない。T氏は果敢に筆談を試みる。そして今思い返しても恥ずかしさで一杯になるが、出発直前に仕入れたかすかな中国語をうろ覚えのまま口に出さざるを得なくなった。私はせっぱ詰まるとキーが1オクターブ上がり、声が大きくなる。無茶苦茶な中国語を苦しまぎれに叫ぶものだから、周りに座っていた仲間達は何ごとかと心配して見回りに来る。T氏は空白をつくるまいと次の対話の種を考え、私はそれを伝えようと脂汗を流しながら奇声を発するの図と相なった。

一時間は意外と短かった。上海に近づいたことが分かってホッとした。しかし、もっともホッとしたのは向かいの中国人親子であった。上海に着くや否や、それまでの緊張から解放された様子がよく分かった。奥さんの方は、目を丸くして天井を見上げ、ぐったりとした。

そしてもっとも楽しんだのは冒険主義者T氏であったのは言うまでもない。

大変な「対話」ではあったが、上海に住む中産階級の家族にとって、蘇州へ指定席の列車で出かけることは恰好の休日レジャーであること、また夫婦が一人っ子をじつに大事に育てていることを垣間見ることができた。そして小学生でも、日本の中学生レベルに負けない英会話能力をもっているというのも、我が子を振り返れば尚さら驚きであった。

中国企業視察印象記 —— 繊維工場を中心として ——

泉 武 夫

以下の記述はあくまで印象記であり、現地での聞き取りと工場見学に基づく私的メモによるもので、どなたにも確認しておらず、記述内容に聴き違いや勘違いがあるかもしれないことを予めお断りしておきたい。

天津市第二棉紡織廠（天津市河西区解放南路347号）

同市は鐘淵紡績系の旧在華紡である公大公司（上海製造絹糸株式会社）の第6廠（紡機



天津第二棉紡織廠＝加藤幸三郎団員撮影